

阪神・淡路大震災

記 録 写 真

日時：1995年（平成7年）1月17日

午前9時すぎ～12時すぎ

場所：神戸市灘区の我が安アパートから
水道筋商店街周辺にかけて

撮影者：吉田清彦

カメラ：ミノルタ HI-MATIC AF2



震災直後の我が住居の惨状。文字通り、足の踏み場もなく、どこから手をつけていいやらわからず、丸一日、呆然と眺めていた。



形のままだにバツタリと倒れたブロック塀。6時前というのは新聞配達の時間で、何人かが倒れたブロック塀の下敷きになって死んだ。



1階がねじれるようにつぶれた2階建ての家屋。1階の奥にまだ人がいるかもしれないのだが、余震が怖くて、だれも救出にいけない。



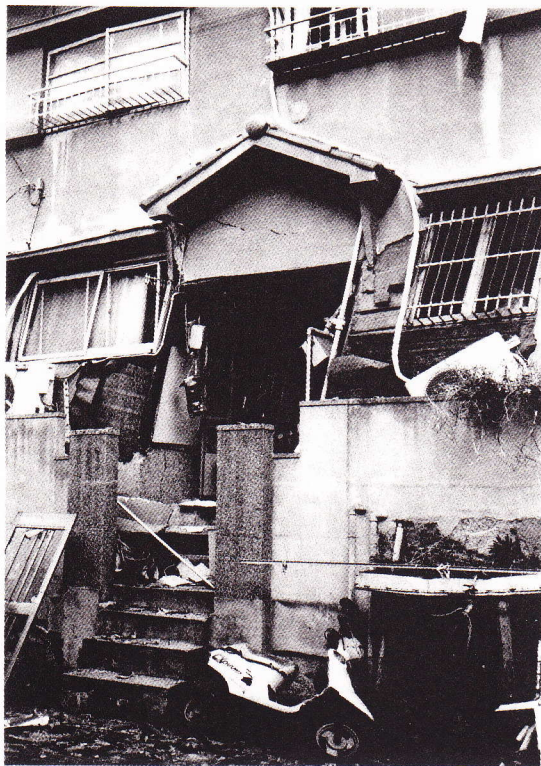
おそらく煉瓦造りの土蔵か何かだったと思うが、屋根の部分だけを残して完全に瓦解している。瓦屋根がどれほど重いかうかがえる。



1階部分を失って、つんのめるように倒れ込んで、道路をふさいだ家屋。すべて落ちた屋根瓦が、衝撃の激しさを物語っている。



原型をとどめないまでにグシャグシャに壊れてしまった民家。真っ直ぐに建っている正面奥のマンションが腹立たしくさえ思える。



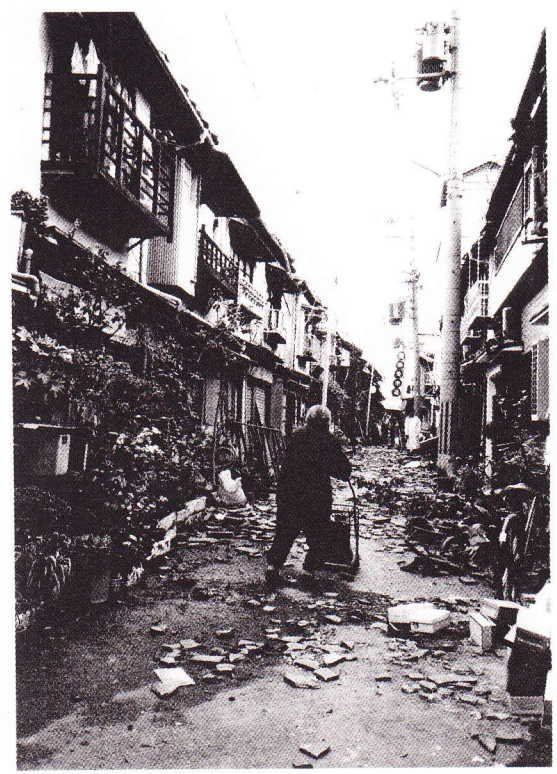
1階部分が菱形にひしゃげた木造アパート。住むところを奪われるということは、生活の足元をすくわれることに等しい。



1階が潰れて、つんのめるように道路に飛び出した2階。1階は店舗で、柱がなくシャッターだけという構造の家屋の多くが倒壊した。



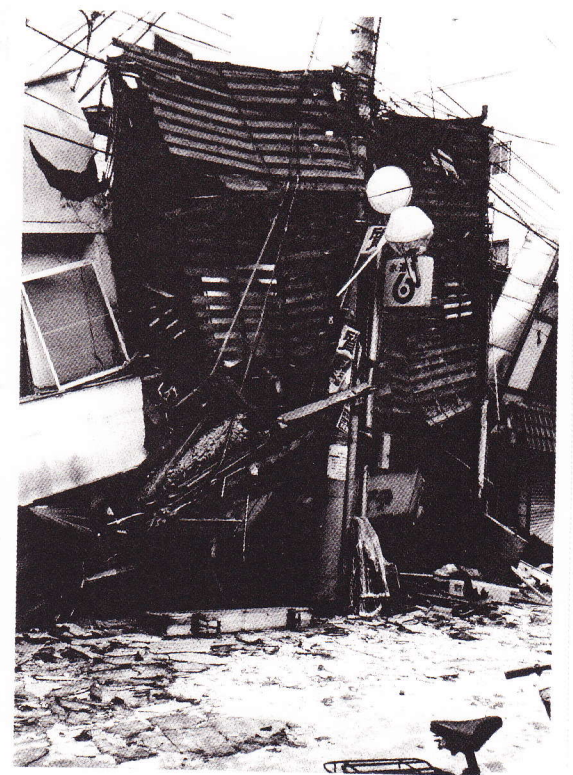
左側と奥の建物の壁面に痕跡だけを残して壊滅した商店。いったい、どれほどの力が加わって、このような壊れ方をしたのだろうか。



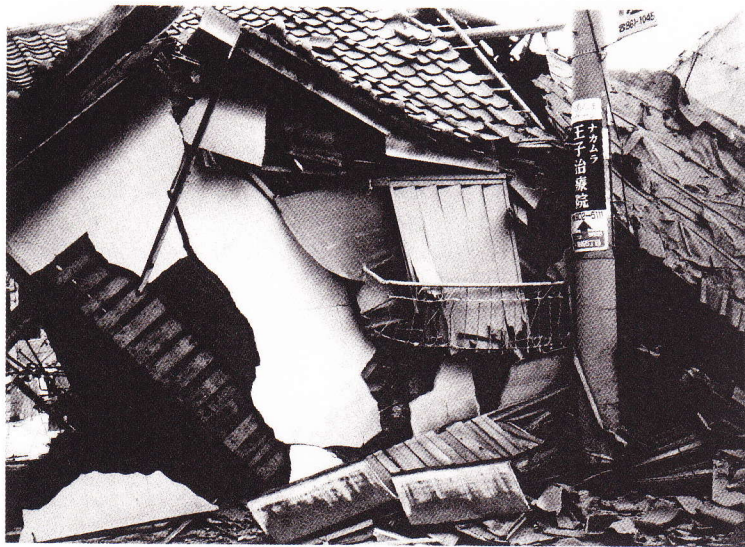
木造2階建ての文化住宅が建ち並ぶ路地。屋根瓦の散乱ぶりから、室内の混乱状態が想像される。老婆に今後のあてはあるのだろうか。



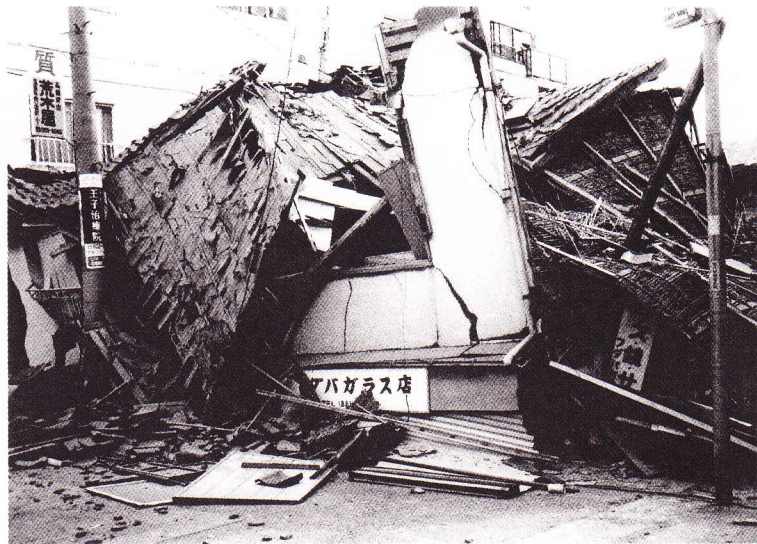
1階が壊れて、膝を屈するように道路側に倒れ込んだ喫茶店。このように、道路側にガラス窓を広くとった店舗の多くがつぶれた。



大振動で、木の枠組みだけを残して壁が全部落ちた店舗。電柱にもたれてかろうじて原型をとどめているが、1階部分はつぶれている。



1階がつぶれ、2階も体を折るような恰好で壊れている商店。前後左右ありとあらゆる方向から突き揺すぶられて、このような形に。



体をねじるようにして倒壊したガラス店。屋根が落ち、壁がはがれた残骸からは、元の商店の姿形を思い浮かべようもない。



傾いた鉄筋4階建てのビル。1階部分が押しつぶされている。おそらく、この商店の1階部分は資材置場で、柱が少なかったのだろう。



川沿いの側道に大きく走る亀裂。縦方向に10cm以上、横方向には30cm近くのズレがあり、断層が大きく動いたことを物語っている。



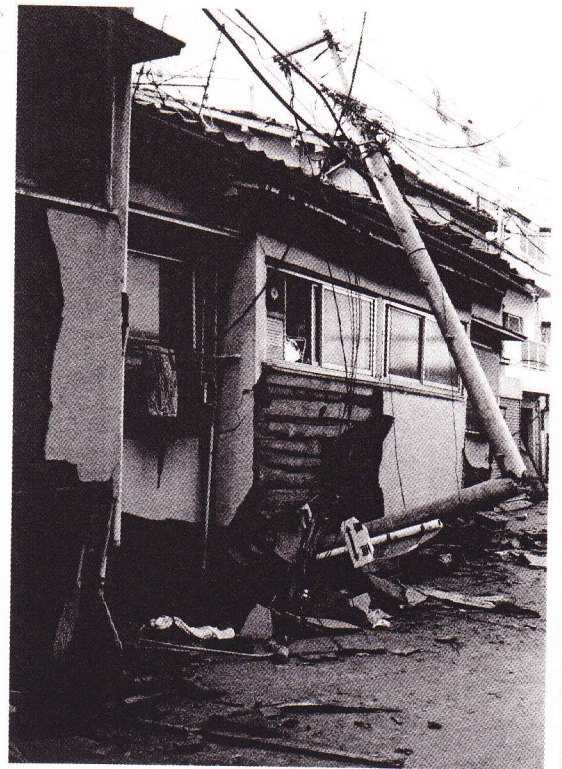
いっけん被害がなさそうに見える鉄筋4階建てのビル。だがよく見ると、2階部分がつぶれて、3階から上が道路側にせり出している。



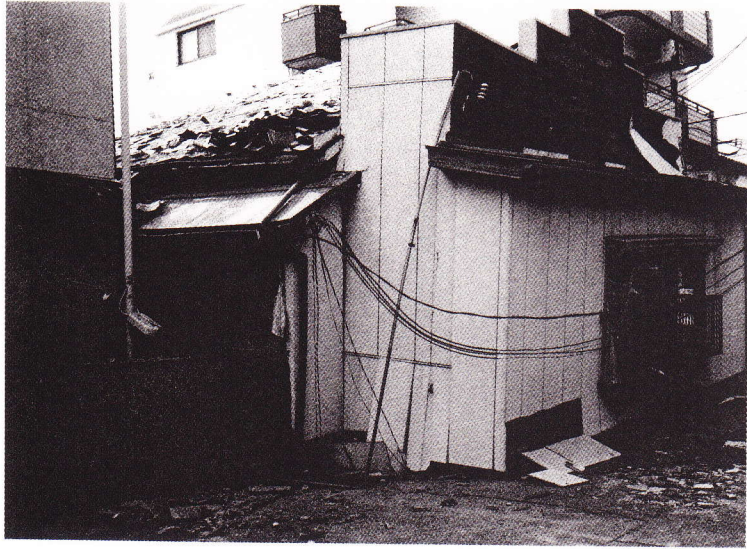
道路沿いに建ち並ぶ同じような家の、あるものは壊れ、あるものは残る。その彼我の差は、いったい、どこにあったというのだろうか。



木造2階建ての共同住宅。1階部分が壊れて出入口を失い、2階から家財道具を取り出す。1階の住民の命は無事だったのだろうか。



民家が軒並み1階部分を失って道路にせり出している。電柱をへし折るほどの余程強い力が北側（道路側）に向って動いたに違いない。



おそらく1階部分はガレージで、車が入って
いなかったのだろう。まるで2階部分が最初
からそこにあったかのような錯覚を抱かせる。



狭い2階建ての1階を車庫に改造した民家は、
軒並み壊れてしまった。本当にそこまでして
車が必要だったのだろうか。家を失ってまで。



文化住宅という名の家賃の安い木造2階建て
アパートの1階の多くががつぶれ、社会的弱
者である高齢者や単身者が多く死んだ。



地震のあと、あちこちで出火したが、神戸市
は耐震性の防火水槽の必要性を認めてなかつ
たので、火を消せなかった。行政災害である。



傾いた入口が左手に見えるので、中央部に廊下のある共同住宅なのだろう。つつましく生きてきた人の命や暮しが一瞬にして奪われた。



1階が車庫の民家の多くはつぶれた。それにしても、超然と建っている後方の建売住宅とのコントラストは今回の震災を象徴している。



商店街の角地にあった店。いったい何屋だったかを思い出すことさえできない。隣の店との境が引きちぎられて、丸見えになっている。